

第185号 西光

令和3年2月20日発行

靈閑だより

頭の体操

地獄行き？ 極楽行き？

門前掲示板より

気になる・・・

「六」という数字 六道・六地藏・六文銭

日常に溶け込む仏教語 ～浄土宗西山勤行式から～

「通」と「道場」

春彼岸会中止のご案内 etc.

仏教って私に関係あるの!?

以前、友人に「友達に弁護士と医者と坊さんがおったら安心やわ」と冗談半分で言われたことがあります。やはり僧侶の出番は亡くなってからというイメージです。お葬式か法事でしか僧侶を見ることがないと、そう感じて無理はありません。残念ながら僧侶側の力不足でそれが現実です。

仏教はなぜ生まれたのか？

お釈迦さまの出発点は「どうすればこの世の苦しみから逃れることができるのか」です。しかし、一言に苦しみといっても苦しみにいろいろあります。そこでもう少し詳しく苦しみを分けると、生きること・老いること・病にかかると・死ぬこと・四つ（生老病死^{しょうろうびじ}）です。今のお寺は最後の「死」の比重が大きくなりすぎてしまっているのです。「死」以外の「生老病」も仏教の担当する分野です。本来、宗教Ⅱどう生きるかという生き方を教えるものです。

苦Ⅱ思い通りにいかないこと

「苦」では漠然としていますので、「思い通りにいかないこと」と言い換えてみましょう。途端に身近な問題になってきます。老いること・病に罹ること・死ぬことはいずれも思い通りにいきません。最初の生きること、これもそうです。考えてみて下さい。一日には自分の思い通りにいかなかったことがどれほどあっただろうか。最近怒りつづくなった人は、恐らく自分の思い通りにいかないことが増えたのでしょう。赤ん坊や幼い子供の世話、老齢の親の介護にあつては、ほぼ全て思い通りにいきません。それだけ私たちは「苦」を抱えて毎日生きています。お釈迦さまはそんな悩める私達にどう考え、行動するのがよいのかを教えてくださいます。それがお釈迦さまの教え、つまり仏教です。

お釈迦さまはお医者さん

お釈迦さまの説法は医者おうびょうやくの診断と似ているといわれます。「応病与薬」といって、医者が患者の病状に**応じて薬**を与えるように、お釈迦さまも人々の悩みや愚痴を聞いて、その人に合ったお話をされました。

「般若心経」の前半部分に「**無苦集滅道**」とあります。これは四諦しつたい（苦諦くたい・集諦じつたい・滅諦めつたい・道諦どうたい）というものです（次頁参照）。

その治療には特徴があります。まず、病状を治す・軽くするという目的は同じでも患者によって処方箋・治療法が違います。全く正反対のことを言うこともあります。

もう一つの特徴は、患者が自分自身で病を治す答えを見つけ出せるよう、方便ほうべん（真実に導くための仮の手段）でもって治療に導いていくことです。「芥子の実」の話を紹介しましょう。

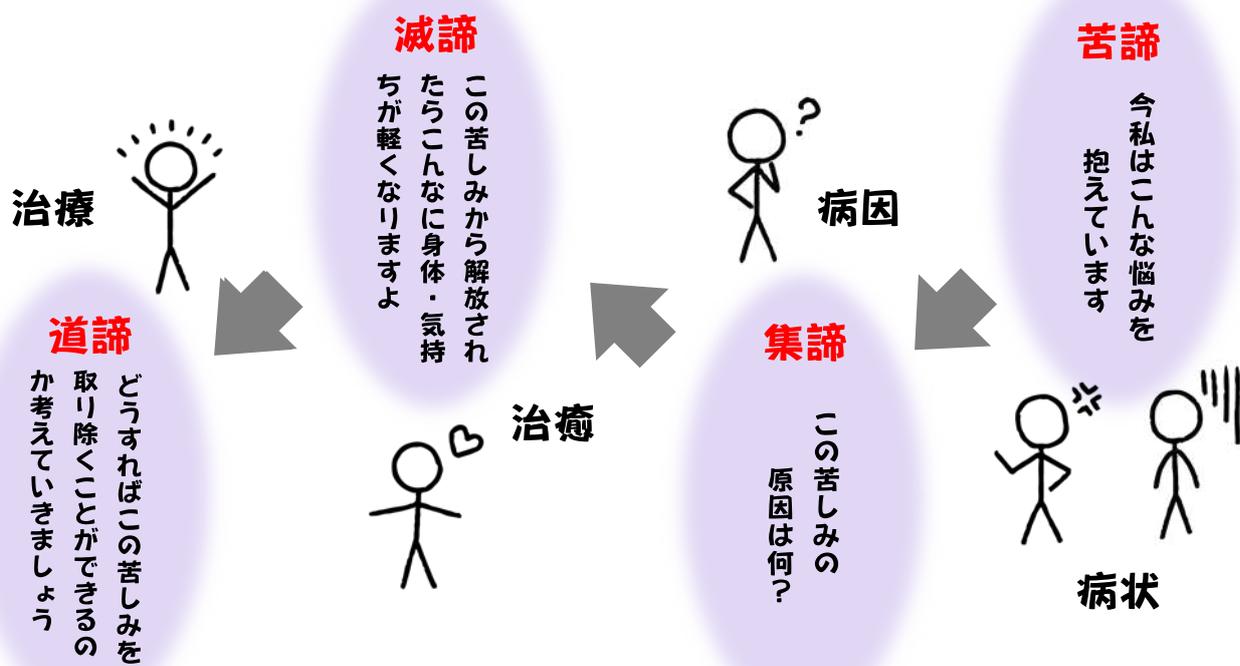
芥子の実

キサー・ゴータミーはまだ幼い男の子を病気で亡くします。悲しみに打ちひしがれた彼女は、この子の病気を治す者はいないか、薬はないかと尋ね回ります。しかし皆は彼女を哀れに思うだけでどうすることもできません。それを見かねたある人が、お釈迦さまのもとへ行くように勧めました。

訪ねてきた彼女にお釈迦さまは「この子の病気を治すには芥子の実がある。ただし一度も死者を出したことの無い家からもらってこなければなりません」と言われました。

そこで彼女は芥子の実を求めべく、町に戻りました。芥子の実は得やすいものでしたが、お釈迦さまが付け加えられた「死者を出したことの無い家」などどこにもなかったのです。ついに求める芥子の実を得ることができず、お釈迦さまのもとへ戻った彼女は、はっとお釈迦さまのことばの意味に気づきました。

そして彼女は亡き子を墓に納め、お釈迦さまの弟子となりました。



お釈迦さまの診断

〈キサー・ゴータミーの場合〉

もしお釈迦さまが「よし、私がこの子を生き返らせよう」と言ってしまったら、もはやただの奇跡の話で終わってしまいます。もちろんそういう宗教もありますでしょう。しかし仏教は死という厳然たる事実（無常）を受け入れることを説きます。お釈迦さまが芥子の実に条件をつけたのは、彼女に気づかせるためです。そして彼女は気づきました。一度も死者を出したことがない家などないことを。どんな人も愛する家族との死別を経験していて、自分だけが悲しみを抱えているのではないのだと。人生には四つの約束事があるといえます。

- ・ 繰り返すことができない
- ・ 必ず終わりがくる
- ・ その終わりはいつやってくるかわからない
- ・ 代わってやることはできない

彼女もこれらのことに気づいたのではないかと思うのです。そして自分と我が子しか見えていなかった彼女の目に、他の人の苦しみや悲しみも見えるようになったのです。お釈迦さまは彼女に寄り添いながら、気づきへ導きました。「一度も死者を出したことがない家から芥子の実をもらってきなさい」というのは、彼女を真実へ導くための仮の手段Ⅱ方便だったのです。

お釈迦さまによる

グリーンフケアの実践

お釈迦さまの方針は「否定」「避ける」ではなく、「受け止め、抱えて」生きるです。否定から得られるものはありません。悲しみを抱えながら生きる適応を目指すことをグリーンフケアといいます。グリーンフケアは悲歎という意味です。「芥子の実」の話はまさにお釈迦さまによるグリーンフケアの実例です。ただし、「一度も死者を出したことがない家から

芥子の実をもらってきなさい」というのは彼女への処方箋であって、お釈迦さまは別な時には違ったことをおっしゃるかもしれません。彼女にとって最良の処方これがどと思ひ、彼女が自分自身で答えを見つけるまで、辛抱強く待っていたのです。

「頑張ってるね」は諸刃の剣

悩んでいる人に、また気持ちが悪くなる人に向かつて、私たちは「頑張ってる」といった言葉をついついかけてしまっています。頑張りたいけどその気力すらない人に「頑張れ」は酷です。励ましにも慰めにもなりません。今全力で頑張っている人に「頑張れ」は「頑張ってるわ!」となります。「頑張ってる」は便利な言葉ですが、同時に無責任な言葉でもあります。その人に寄り添い、適当なタイミングで、適当な言葉をかける、本当に難しいことです。

頭の体操

地獄行き？ 極楽行き？

あなたは死後の世界をとぼとぼと旅をしています。細い一本道を一人で歩いています。すると道が二つに分かれる所に来ました。一本の道は地獄に通じています。もう一本は極楽への道です。もちろんあなたは極楽に行きたいのですが、どちらの道が極楽への道分かりません。するとそこに小屋があり中には案内人がいます。案内人は黙ってあなたに一枚の紙を渡しました。そこにはこう書いてあります。「ここにいる案内人は、極楽と地獄から日替わりで出張してきている。極楽から来た案内人であれば、あなたの質問に正しい答えをする。しかし、地獄から来た案内人であれば、嘘の答えをする。そのことをよく心得た上で質問するよう。ただし、あなたは一回だけしか質問できない」

さぁ困りました。質問が二問許されるのであれば、例えば「 $1+1$ は？」などと適当に質問して、「3」と答えればそれが地獄からきた案内人だと分かるので、次に極楽への道を尋ねるといいわけです。そして彼が左というと右へ、右と言うと左へ行けば極楽へ行けます。しかし質問が一回しか許されませんので、相手が極楽の人か地獄の人か確かめようがありません。さぁどう質問すれば極楽への道が分かるのでしょうか？





気になる…

続・「六」という数字

六道、六地藏、六文銭

前回、枕団子の六という数字は六道からきているのではないかとこのころで終わりました。今回はその続きです。

六道について、少しおさらいですが、六道は地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天という六つの世界のことで、六道輪廻とはこの六つの世界を輪廻、つまりぐるぐるさまよいまわっているということです。地獄（＝恐怖）・餓鬼（＝飢え）・畜生（＝欲望）・阿修羅（＝争い）までの明らかにキビシイ世界に加え、な

んだか素敵そうな神々が住む天の世界もやはり寿命や苦しみがある世界ということでした。仏教はこの苦しみを続ける六道輪廻の世界から脱して、苦しみのない悟りの世界、極楽に生まれようと説きます。

六地藏や六文銭の六もこの六道の考え方からきています。六体並んだお地藏さん、六地藏を必ずどこかで見かけたことがあるはず。例えば姫路市の名古屋山齋場にいらっしやいます。入ってすぐ右側です。

お釈迦様は約二千五百年前のお方ですが、そのお釈迦さまが亡くなられてから、次に弥勒菩薩という菩薩さまが仏としてこの世に登場してくるまで、なんと五十六億七千万年の期間は仏がない状態が続くといいます。ですので、お地藏さんは無仏の期間、悩み苦しむ人々を救済する菩薩として、お釈迦さまから「皆の衆を宜しく頼んだぞ」と託されているわけです。ですので今現在

も私たちはお地藏さんのお世話を頂いているのです。そして、その対象が人間にとどまらず、六道の六つの世界すべてに及ぶと考えられました。そこでそれぞれの世界を担当するお地藏さんに一文銭ずつお供えていくのです。ですので一銭×六体で六文銭が必要になってくるわけです。この世とあの世の境にある三途さんずの川を渡るための渡し賃として、棺の中に六文銭を入れることもあるようです。

どの地藏がどの世界を担当？

ところで、六地藏をよくみると、どうも皆違うものを持っているようです（同じ形のこともあります）。持ち物は数珠であったり、旗であったり、ただ合掌していたり…実はどのお地藏さんがどの世界を担当し、何を持っているのかはものによって



無縁墓のお地藏さま。二体とも左手に宝珠、右手は壊れていますが、かつては錫杖を持っていた名残があります。

まちまちだそうです。ただし意のままに願いを叶えるという宝珠と、錫杖という先にジャラジャラと輪っかのついた杖を持っているお地藏さん（上図では左から三番目）は、一番キビシイ地獄道の担当であることは共通しているようです。六体でなく、一体だけいらっしやるような場合はだいたいこの宝珠ほうじゆと錫杖しゃじようを持ったお地藏さんであることが多いはずです。

六道は自分自身の心の状態

さて、六道という迷いの世界というのは実は、常に揺れ動いている自分自身の心の内面であることに気づきます。責め苦を受け、恐怖に苛まれている状態はまさに地獄です。あれもこれもと満足を知らず常に飢えている状態は餓鬼の状態です。自分本位に本能むき出しで行動してしまうような時、それはもう畜生です。食欲・物欲・性欲など欲と名の付くものはそうでしょう。些細な言い争いや喧嘩から殺人、戦争に至るまで様々な争いごととは阿修羅状態です。そして人や物の間で揺れ動きながらも、平

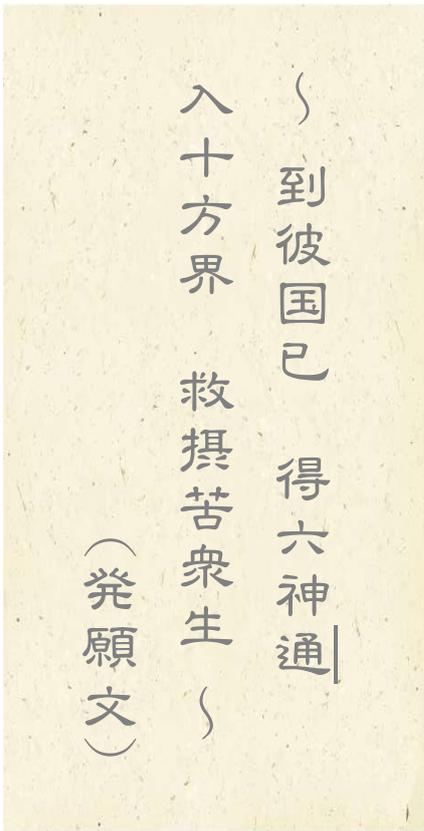
常な心持ちでいられる状態は人間といえます。そして喜びの境地は天です。しかし、そんな喜びの絶頂にあってもいつかは終わりを迎えます。それが嫉妬・反感を生み、一転地獄に堕ちてしまうこともありうる話です。天といえど、やはり永遠ではありません。何年か前の「心のともしびカレンダー」の標語に「こころは コロコロ 年中無休」とあったのを思い出しました。

この六道をコロコロしている私達ではございませぬが、お葬式は自分にとって大切な方の極楽往生（＝六道を抜け出て、阿弥陀仏の極楽の国に往生される）を願うものであります。もはや斎場の六地藏の前を素通りするわけにはいきませぬ。お葬式のシリーズはまだ続きます。ではまた次回に。

日常に溶け込む仏教語

浄土宗西山勤行式から

【通】



通

は「あの人は通つうやな」と
などと、ある領域において詳しいこ
とをいいます。通は神通力じんつうりきの通とい
われます。赤いお経本の「発願文ほつがんもん」
というお経に「六神通」とでてきま
す。六つの神通力で、神通力は人知
で計り知れない仏の持つ自由自在な
能力のことです。発願文のこの部分
の意味は「私たちは亡くなったらお
浄土に生まれ、阿弥陀仏の下で修行
に励み、そこで得たこの力でもつ
て、悩み苦しむあなたたちを見守
り、救いの手を差し伸べるのだ」と
いうものです。

さらに「通」のもとをたどれば、
「通達」からきているようです。普
段はお役所などからの通知の意味
で、「つうたつ」と読みますが、仏
教では「つうだつ」と濁ります。ち
なみに同じく右の赤いお経本にある
「肆誓偈しせいげ」というお経にも「通達」
は二カ所出てきます。探してみてく
ださい。この通達はよく理解するこ
とで、悟りとほぼ同じ意味です。す
べてによく通じて、完全な領域に達
するということでしょうか。



日常に溶け込む仏教語

浄土宗西山勤行式から

【道場】

奉請十方如来 入道場 散華楽
奉請釈迦如来 入道場 散華楽
奉請弥陀如来 入道場 散華楽
奉請観音勢至諸大菩薩
入道場 散華楽

(四奉請)

道場

という柔道や空手などの武道の稽古場をイメージします。元は「お釈迦さまがさとりに(成道)を開かれた場所」、インドのブツダガヤの菩提樹ぼだいじゆの下であったのが、所はどこでもいいので、とにかくさとりを開く場、仏道修行の場をいうようになったようです。

赤いお経本の「四奉請しふじよう」というお経に、この道場が出てきます。これは「準備万端整い、いよいよ今からお勤めを始めますので、どうぞ仏さま、この道場へお入り下さい」という意味のお経です。手を合わせお経をあげる場所はお寺だけに限りません。皆様の家も立派な道場なのです。



浄土宗西山勤行式



庭のツバキにやってきたメジロ

門前掲示板より

十二月

善とは後味の良いこと
悪とは後味の悪いこと

一月

難有ればこそ 有り難し

二月

あなたの生涯は
過去にあるんですか
未来にあるんですか
君はこれから花が咲く身ですよ

(夏目漱石『野分』)

遅すぎるといふことはありません

<5ページの正解>

「わたしはあなたの国に行きたいのですが、あなたの国はどちらですか？」

案内人が極楽から来た人であれば、ちゃんと極楽への道を教えてください。
反対に地獄から来た人であれば、案内人は必ず嘘をつくのですから、
自分の国ではない極楽への道を教えてください。

お知らせ



【西光寺役員の去就】

【ご逝去】総代 梶原恭一郎さん

昨年11月23日、総代の梶原恭一郎さん（西梶原）がご逝去されました。梶原恭一郎さんは、先々代の時代より60余年もの永きにわたり西光寺総代をお務め頂きました。数々の事業を推進していく中で、的確な判断により、お寺の進むべき道を示して頂きました。「西梶原さんに育てて頂いた」という言葉の通り先代にとっては、心強い存在でありました。昭和51年の先代の住職就任式（晋山式）や昭和59年の本堂再建時の落慶法要の際には、立宿として西梶原さんのご自宅からお稚児さんと一緒に出発してお寺へ向かいました。三代に渡って大変お世話になりました。その多大なる功績に厚く御礼申し上げます。

【退任】北脇丁世話人 入江厚子さん

入江厚子さんは、平成23年より北脇丁の世話人をお勤め頂き、当山の護持運営にご尽力頂きました。私の僧侶人生のスタートと同じタイミングでご就任頂き、様々な活動を共にして頂きました。残念なことではありますが、この度ご退任されることになりました。長年に渡りお世話を頂き、誠に有難うございました。

【就任】中ノ丁世話人 乙女尊正さん

この度、中ノ丁の世話人として乙女尊正さんにご就任頂くことになりました。お世話になりますが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

【ご逝去の報】

生前の温顔を偲びつつ、お十念を捧げます。

西浜	乙女シナ子さん(93歳)	11月13日没
曾根	湯谷美由紀さん(53歳)	11月17日没
宮本丁	梶原恭一郎さん(92歳)	11月23日没
木場	木下六郎さん(95歳)	12月14日没
中ノ丁	阿波孝子さん(91歳)	12月22日没
中ノ丁	横山とみゑさん(86歳)	12月29日没
東ノ丁	梶原久和さん(76歳)	1月4日没
千葉	高澤廣志さん(89歳)	1月21日没
姫路	八若泰士さん(90歳)	1月30日没

【手すりの設置】

安心、安全にお参り頂けるよう、本堂前の石階段に手すりを設置いたしました。



春彼岸法要の中止について

依然として兵庫県に緊急事態宣言が発令中です（2/20現在）。

春のお彼岸の時期には解除になっているものと思われませんが、見通しが依然として不透明なため、この度の春のお彼岸法要は中止にさせて頂きたいと思いません（寺族のみで勤めます）。

感染拡大防止のため、どうぞご理解の程、宜しく願い申し上げます。



辺り一面びっしりと生えた草と草引きの相棒の肥後守ナイフ

に、「一掃除、二勤行、三学問」ということばがあります。なによりもまず掃除が一番にきているところにガッテンです。

しかし草を引いている時はなぜこころも無心になれるのでしょうか。テレビや新聞を見ながらご飯、音楽を聴きながら勉強はあっても、音楽を聴きながら、お菓子を食べながら草引きなどは聞いたことがありません。草引きは肥後守ナイフで一本一本根っこから確実に抜きます。ただただ目の前の草と向き合っていて、余念がありません。今改めて、草引きから仏教の神髄を学んでおります。僧侶たるものこうあるべきという心得に、「一掃除、二勤行、三学問」ということばがあります。なによりもまず掃除が一番にきているところにガッテンです。

後記

冬の間、鳴りを潜めていた境内や庭の草が徐々に動きを見せ始めております。まだまだ寒い日もありますが、土の中では確実に春が近づいてきているようです。

『西光』185号 令和3年2月20日発行



浄土宗西山禅林寺派

雲龍山 西光寺 住職 大塚靈閑

〒671-0101 姫路市大塩町229

Tel 079-254-0351 Fax 079-254-4142

